

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06015

研究課題名(和文) 日本仏教という観念 歴史・近代・国家

研究課題名(英文) The Idea of Japanese Buddhism: History, Modernity, and the Nation-State

研究代表者

KLAUTAU Orion (KLAUTAU, Orion)

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：10634967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、歴史叙述思想を含む仏教者の自他認識が、国民国家の成立期において如何に変容していったのかを検討した。すなわち近世後期から敗戦後の時期に至るまでの仏教者の国家論・道徳論・歴史論を考察し、その作業を通して「日本仏教」なる概念の本質化の総合的記述に取り組んだ。具体的には、1853年以降の僧侶による仏教観の変遷、明治20年代における仏教者の道徳論、同30年代の仏教者の教育事業と修養論、大正・昭和期の仏教史叙述とナショナリズム、敗戦後の「日本仏教」言説の変容、といった四課題に対して学術成果を示し、近代国家における言説装置としての「日本仏教」の役割への更なる理解に貢献した。

研究成果の概要(英文)：This research considered, in the context of the formation of modernity, shifts in the way Buddhists understood themselves vis-a-vis their "others" (Christians, Nativist scholars, foreigners, etc.), including changes in the ways they depicted their own history. I have focused mainly on five topics -- namely changes in the understanding of Buddhism after 1853; discussions of national morality in the Meiji 20s; educational enterprises and discourses on "shuyo" during the Meiji 30s; historical writing and nationalism in the Taisho and early Showa years; and the transition of the idea of "Japanese Buddhism" into the postwar period. Besides numerous specific findings pertaining to each of the above issues separately, I was also able to provide further insight on the broader role played by "Japanese Buddhism" as a discursive device within the framework of the modern state.

研究分野：思想史

キーワード：日本仏教 近代国家 宗教言説 ナショナリズム 近代仏教 Modern Buddhism

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者がこれまで行ってきた近代日本(1868-1945)における仏教の「史的」研究に関する成果(『近代日本思想としての仏教史学』法蔵館、2012年)を踏まえ、その前史および戦後的展開について検討しようとするものである。換言すれば本研究は、「仏教」とその周辺の諸概念(宗門・宗旨・教法)の歴史的展開を通して、モダニティとしての日本近代の更なる理解に貢献することを目的とする。このことは同時に、「非西洋」である諸国が、「西洋」諸国によって形成された「宗教 religion」なるものを如何に認識し、受容したかを論ずるものであり、その言葉の理解が異なるゆえに「文明」同士が「衝突」していると一部の思想家にいわれる現在の世界状況を考察することに、大きく資するところがあると信じるものである。

「仏教」という言葉は現在、漢字文化圏において日常用語の位置を占めているが、例えば明治期(1868-1912)より前は、今に比して極めて限定的な使い方がなされた。熟語としては存在したものの、現在の我々がいう“Buddhism”ではもちろんなく、「仏」の「おしえ」という教理的な意味で把握されていたのである。それに対して、「仏法」や「仏道」の方が広義の言葉として用いられ、言語的な表現である教理(belief)の側面に加え、非言語的な行為(practice)をも含むタームであった。つまり江戸時代まで、仏者とは、何か独特の対象を信じるというよりも、特定の儀式的行動を示す人を指すものであった。しかし幕末期から、欧米列国との外交関係を有するようになり、維新时期以降はさらに「西洋」の学知をも導入していった日本の知識層は、先に取り上げたような、欧州の枠組において成立した“religion”概念に直面した。

明治期における主な国際的語りの相手とは、プロテスタント系のキリスト教を掲げる諸国であったため、日本にもたらされた religion 概念はその諸派がするように、practice ではなく belief に重点を置くものとなった。これは、それまでの日本列島におけるいわゆる宗教のあり方と矛盾するようなものであり、ヨーロッパ系の言語における religion という言葉は如何にして表現すべきか、ということが死活問題のひとつとなった。最初は「宗門」・「宗旨」・「教法」などの既存の語も当てられたが、それらでは表現できない部分もあるとされ、そこで「宗教」という造語が登場して、紆余曲折の末、定着した。これはもちろん、複雑なプロセスを経てのことであ

ったが、その結果、江戸期に教育を受けた仏者もそういった「宗教」という新たな枠組において自己を語りなおさなければならなくなった。その際、次のような課題が生じることとなる。つまり、それぞれが全く異なる經典をかかげ、様々な宗派に分かれている仏教の最も根本的な經典、すなわち『聖書』に対峙しうるような教理体系とは、一体いかなるものなのか。そして直接の經典的根拠をもたない仏教実践とは、如何に捉えるべきなのか。

これらの問いは、それまで実践的な側面を重視した「仏道」を「仏教」に変遷させ、教理を中心とする「宗教」へと展開させた。しかし、その「教理」の探求と同時に、それと表裏一体のものとして、それまでに正面から取り上げられることのなかった「歴史」の問題も浮上することとなった。明治期において、近代的な梵語学が導入されると、日本列島に成立したほとんどの宗門がその一環である「大乘」は「宗教」としての「仏教」の開祖である釈尊に還元し得るものではないことが、ひとつの常識と成っていった。そのコンテキストで、大乘は「史実」でなくとも、仏陀が伝えようとした「真理」の歴史的展開であると示す、東京(帝国)大学教授であった村上专精(1851-1929)のような思想的営為もみられるようになった。これはもちろん、明治期に成立した「国史」との関係において展開される営みであり、当時の思想全体を表現するエピソードでもあろう。

上記のような思想的枠組を念頭において、本研究は仏教における伝統的な歴史叙述思想が、国民国家の成立期において如何に展開し、そして、それまでの国家の有り様が否定された敗戦後の日本に如何なる変遷をみせたのかを考えようとするものである。

2. 研究の目的

研究代表者は上述の拙著『近代日本思想としての仏教史学』において、東京(帝国)大学の枠組で展開された研究を軸として、明治中期から昭和10年代までの時期における近代日本の仏教史的な営みとその政治的背景について考察している。その展開である本研究では、対象となる領域および時代を広げ、以下のようなことを検討した。

- (1) 僧侶養成施設が成立し、実証性も主張されていく近世後期における仏教者による世界像および自他認識の変容。
- (2) 前掲拙著で扱えなかった事例を取り上げつつ、ナショナリズムの時代における仏教論の社会的役割。

(3) 第二次世界大戦の敗北にともなって変遷する「日本仏教」の歴史叙述の総合的な検討とその意義。

3. 研究の方法

まず、江戸中後期のコンテキストにおいて展開する仏教論は、西洋的な学問が積極的に導入される明治期以降の社会において如何なる断絶があり、如何に継承されていったのかを検討した。その成果を踏まえ、吉谷覚寿(1843-1914)や村上専精(1851-1929)などの東京(帝国)大学系の仏教研究者の思想的営為を検討し、1900年代以降の帝国主義の時代における仏教史を総合的に考えた。最後には、1970年代に至る戦後社会において、帝国時代までに成立した日本仏教史叙述のスタイルは、いかなる連続と断絶をみせたのかを明らかにした。

4. 研究成果

- (a) 近世後期における仏教思想の歴史的展開について検討した。18世紀以降に成立する新たな歴史意識の枠組で、仏教者の自己認識がいかに展開するのかなどについて考察した。より具体的には幕末期を代表する勤王僧・月性(1817-1858)の営為や、幕末期において大活躍した学僧・龍温(1800-1885)の思想的活動といった課題に取り組んだ。その成果として、月性が執筆したテキストである『護法意見封事』を下に作成された『仏法護国論』の英訳を完成し、それが2018年に刊行予定の近代仏教史料集に所収される。龍温についても、大谷大学図書館の円光寺文庫で、研究史上、これまで着目されることがない新史料を発見し、龍温の護法活動を通して幕末期の仏教思想への地平を拓ける段階に至りつつある。
- (b) 江戸後期の新たな自己観を踏まえて「仏法」を語りなおした月性や龍温の思想的営為は、明治期の仏教論といかに連絡していくかについても考察すべく、村上専精を検討した。1890年代の(東京)帝国大学で仏教の講義を担当した初期の教員である村上は、世紀転換期において「大乘非仏説」を唱えたことで着目されることが多いものの、これまで見落とされてきた1880年代における彼の道德論を、同時に展開されつつあった仏教概念の再構築との関係において検討した。
- (c) 1890年代前半より形成されるような仏教者の思想的営為は、日清・日露戦争の時

期においていかに展開していくのかを検討すべく、同時期における仏教者の「修養」なる觀念に焦点を当て、学術論文を用意した(近刊)。

- (d) 昭和初期における日本仏教論を、当時の史学思想との関係において考察し、言説装置としての「廢仏毀釈」の役割を示すことができ、その成果を国際学会で報告した。そして昭和初期まで形成されてきた思想界は、「大日本帝国」が崩壊し、植民地が没収される戦後まもなくのコンテキストにおいて如何に連続し、断絶したのかも考察し、その成果の一部を『戦後歴史学と日本仏教』として公開した。

以上、本研究を通じて、近世後期から戦後にいたるまでの時期、すなわち国民国家が形成されていく時代における仏教者の国家論・道德論・歴史論を総合的かつ展開的に考察し、単著『日本仏教という觀念 歴史・近代・国家』(仮題)の土台となる研究をまとめることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Klautau, Orion. “Pensamento japonês: Uma ideia em (re)construção”, *Anais do XI Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil/XXIV Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa*, Manaus: UFAM, 2017 (査読無、印刷中)

桐原健真、オリオン・クラウタウ「近代日本仏教の「前夜」 幕末維新时期における護法論の射程」『日本思想史学』47、2015年、28-36頁(査読無)

クラウタウ、オリオン「Hayashi Makoto, Otani Eiichi, and Paul L. Swanson, eds. *Modern Buddhism in Japan*. Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014」(Book Review)『宗教研究』383、2015年、161-165頁(査読無)

Klautau, Orion. “Mohr, Michel. *Buddhism, Unitarianism, and the Meiji Competition for Universality*. Harvard University Press, 2014” (Book Review), *Japan Review*, 28, pp.249-252. (査読無)

[学会発表](計9件)

Klautau, Orion. “A Brief History of the Idea of Religion in Modern Japan”, Facultad de Filosofía y Letras, Universidad Autónoma de Madrid (Madrid, Spain), 2017年03月17日

Klautau, Orion. “O desenvolvimento do conceito de religião no Japão pós-restauração Meiji”, Workshop Portugal-Japão, FCSH, Universidade Nova de Lisboa (Lisbon, Portugal), 2016 年 12 月 14 日

Klautau, Orion. “Replacing Persecution: Haibutsu Kishaku in Early Shōwa Historiography”, 2016 American Academy of Religion Annual Meeting, San Antonio, TX (USA), 2016 年 11 月 19 日

Klautau, Orion. “The Two Truths in Modern Academia: Murakami Senshō and the Shinzoku Nitai”, IASBS Panel Session (2016 AAR), San Antonio, TX (USA), 2016 年 11 月 19 日

Klautau, Orion. “Pensamento japonês: Uma ideia em (re)construção”, XI Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil, UFAM, Manaus, AM (Brazil), 2016 年 9 月 23 日

Klautau, Orion. “O Conceito de Religião no Japão Moderno: uma perspectiva histórica”, Laboratório de Estudos da Ásia, FFLCH-USP, São Paulo, SP (Brazil), 2016 年 9 月 13 日

Klautau, Orion. “In Defense of the Dharma: Buddhism and its 'Others' in Late Edo Japan”, Early Modern Japan Network Meeting (2016 AAS Annual Conference), Seattle, WA (USA), 2016 年 4 月 2 日

クラウタウ、オリオン「村上専精と近代日本仏教」宗教哲学会（於京都大学）2016 年 3 月 26 日

クラウタウ、オリオン「龍温（1800-1885）の活動と近代日本仏教の形成」日本宗教学会（於創価大学）2015 年 9 月 5 日

〔図書〕（計 7 件）

クラウタウ、オリオン・他『生と死の表象』（鈴木岩弓編）「修養としての仏教」執筆担当、岩田書院、2017 年（印刷中）

クラウタウ、オリオン・他『生老病死の宗教文化』（鈴木岩弓編）「小児往生」執筆担当、おうふう、2017 年（印刷中）

クラウタウ、オリオン・他『仏教史研究ハンドブック』（佛教史学会編）「仏教改革運動・その 1」執筆担当（348 頁）法蔵館、2017 年

Klautau, Orion, et al. *Belief and Practice in Imperial Japan and Colonial Korea* (edited by Emily Anderson). “The Question of Quintessence: Buddhism in Wartime Japanese Academia” 執筆担当 (pp.137-152). Palgrave MacMillan, 2017

クラウタウ、オリオン編『戦後歴史学と日本仏教』「序文 戦後歴史学と日本仏教」執筆担当（7-19 頁）法蔵館、2016 年

クラウタウ、オリオン・他『近代仏教スタディーズ 仏教からみたもうひとつの近代』（大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編）「仏教学はどのように成立したのか？」（67-70 頁）「東京帝国大学系 仏教学の誕生」（192-196 頁）「仏教学の形成と展開 大学と仏教の結びつき」（223-224 頁）「近代仏教者のポートレート」（251-253 頁）執筆担当、法蔵館、2016 年

クラウタウ、オリオン・他『比較思想から見た日本仏教』（末木文美士編）「村上専精の比較事業 近代日本仏教思想の形成をめぐる一断面」執筆担当（179-199 頁）山喜房佛書林、2015 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://web.tohoku.ac.jp/klautau-zemi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

KLAUTAU, Orion（クラウタウ、オリオン）

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：10634967